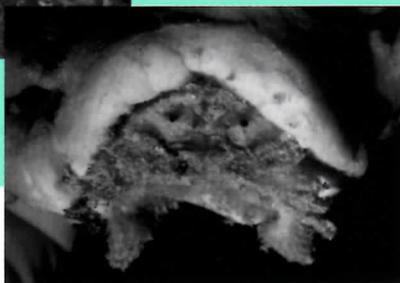




移動するソフトコーラル

Movable soft coral

刺胞動物のうち花虫類はクラゲ世代をもたず、一生を海底で暮らす。このうち六放サンゴ類のハナギンチャク類とイソギンチャク類以外は、自ら移動することができず、一部の例外を除いては最初に付いた場所で生涯を送る。ところが、ある夜、前日までは何もなかった海底に突然高さ10cmを超えるソフトコーラルが生えていた。何かの弾みで岩盤から岩盤ごと外れてしまい、転がってきたのかと思って引っ張って見たが動かない。夜の海でいろいろな可能性を考えていたが、よく見ると、何のことはない、カイカムリの仲間がソフトコーラルを背負っていたのだ。カイカムリにとっては、見事なカムフラージュで敵の目をあざむくことができるだろうが、ソフトコーラルにはなにか利益があるのだろうか？ カイカムリの上では自分で行き先を選べるわけではないから、ソフトコーラルにとってこの関係にあまり得はなさそうに思えるが、本当のところはどうなのだろう。



撮影：岩尾研二
撮影日：2009年8月14日
場所：マジャノハマ

編集後記

編集 岩尾研二（研究員）

今号は、図らずも慶良間の話題ばかりの「みどりいし」になりました。地元で26年間以上活動してきたのですから、こういう号があっても、むしろ良いだろうと思います。昨年は、小笠原諸島周辺に中国からサンゴの密漁船団がやってきたというニュースがありました。そのころ内地の人にサンゴの研究をしていると話すと「今密漁で大変だね」とよく言われました。造礁サンゴと宝石サンゴの区別がない人のほうが、まだかなり多いのでしょうか。慶良間の人たちはどうでしょうか。長年活動してきた組織としては、地元の人には造礁サンゴのことをきちんとわかっていてもらいたいところですが、もしかしたらまだ区別できない人も少なくないかもしれません。慶良間の人たちに島々を囲むサンゴのことをもっと知ってもらえるように、ますます頑張りたいと思います。それにしても、言葉の使い方というのは時に問題になるもので、今号では「諸島と列島」の話を書きましたが、それ以外にも、例えば上に出てきた「造礁サンゴ」も最近は「有藻性サンゴ」とすべきとの意見がありますし、いまだに白化＝サンゴが死んだものと思っている人も少なくありません。これらについては、一度きちんと整理しておきたいので、誌面があればまた次号で述べたいと思います。



発行人

ESTABLISHMENT OF TROPICAL MARINE ECOLOGICAL RESEARCH

一般財団法人熱帯海洋生態研究振興財団

〒141-0031 東京都品川区西五反田1-26-2 五反田サンハイツ614号 TEL. 03-3490-7266 FAX. 03-3490-8278

AKAJIMA MARINE SCIENCE LABORATORY

阿嘉島臨海研究所

〒901-3311 沖縄県島尻郡座間味村字阿嘉179 TEL. 098-987-2304 FAX. 098-987-2875

E-mail: amsl@oki-zamami.jp Homepage URL: <http://www.amsl.or.jp>